

「コミュニケーション学」の確立に向けて
——私的回想からの出発——

倉田 恵介

The Development of the Concept of
Communication as the Basis for an
Academic Discipline: A Personal Review

KURATA Keisuke

The concept of communication as an academic discipline is not always clear and stable. This is due, in part, to the fact that when using the word “communication”, we may mean both the subject and object of study. Thus, we may use this term without making a distinction between its various interpretations. Since communication as an object of study is almost synonymous with human behavior in general, the scope of research is extremely wide and varied. As a result, approaches are many and tend to be interdisciplinary. The key questions are what are the subjects of study and how we should establish communication studies as an academic discipline. We may construct the conceptual framework by defining three factors: (1) “Signs”, a minimum unit of communication structure; (2) “Interaction”, what one does in communicating; and (3) “Relationship”, the implicit meaning of what is communicated. Using Gregory Bateson’s theory for notions of interaction and relationship, together with a semiotic interpretation of the concept of sign, these three factors constitute the basis of the communication discipline. This system is not closed, but should be open to other fields, thus contributing to a meta-science such as Bateson’s epistemological postulates.

キーワード: 記号、相互作用、関係性、意味、開かれた体系

I

「コミュニケーション論」ともいい、「コミュニケーション学」ともいう。どちらもほぼ同義と考えられるが、使われる頻度からすれば前者が圧倒的に多い。「コミュニケーション論」が書名や講義名に使われる場合、それは「コミュニケーション理論」を意味しているに違いない。たしかに「論」は理論を意味するが、そのほか意見とか見解という語義もある。人生論とか人物論というときの「論」はそれだろう。「コミュニケーション論」というと、この第一と第二の意味の境界がぼやけて、ときに安易に使われたりする。論題をあえて「コミュニケーション学」としたのは、これがどんな学問なのかという問いに対して私なりに答えることが小稿の主題だからである。

全米コミュニケーション学会(NCA)の学会報 *Spectra* (1999年4月号)にO.L. テイラー会長(当時)のエッセーが載っている。題は「コミュニケーションとはどういう学問か」。その冒頭部で彼は、かつて学内の同僚からこの表題と同じ質問を受け、続けて「コミュニケーションには独自の理論がない。理論といえば、心理学や社会学や哲学、言語学などからの借り物ではないか」と指摘されたことに対して、この種の“軽視”は、コミュニケーション研究について基礎的認識が欠けているだけでなく、この学問の学術研究面とその応用分野としての専門的スキル養成面(例えば職業としてのジャーナリズムや放送など)を混同していると反論する。コミュニケーション学科(ないし学部)は、アカデミア全体の中で専門家養成機関として認められても、学術研究機関として認められているとは必ずしも確言できない。学会会長として今後も各種の学術研究団体に働きかける努力を続けたいというのがこのエッセーの主旨のようだ。しかし冒頭での発言どおり、他分野の学者たちはコミュニケーション学の理論的知識について理解に欠けると不満を述べてはいるものの、肝心の理論については一言も触れていない。この点こそ私が期待したところだったのだが、NCAの会員ならばそれは自明のことで説明不要というのだろうか。コミュニケーションの理論が心理学や社会学などからの借用だという見方はこの学問を軽んじる態度だとテイラー会長は言うが、はたしてそう断じきれぬものかどうか。

II

1960年、アメリカ合衆国イリノイ州のノースウエスタン大学に留学したとき、私は M. マローニー教授の「放送史」を受講した。彼の講義は、ギリシア哲学の始祖ターレスから始まる独特で魅力あるものだった。なぜターレスから始めたのが、記憶からまったく消えてしまったが、いま改めて推量してみると、古代ギリシア文明の初め根源的質料を水としたのに対し、20世紀文明では電波がそれに当たるということであったかもしれない。彼の講義でいまでもはっきり覚えているのは、マスコミ理論は折衷主義的だという発言である。当時の私は“eclecticism”という用語を否定的に捉えていただけに、肯定的な響きをもった——少なくとも否定的には感じられない語調の——教授の発言が印象に残った。

1950年代、60年代の合衆国では、コミュニケーション学科ないし学部（当時はスピーチあるいはスピーチ・コミュニケーション学科/部と呼ばれていた）にマス・コミュニケーションの研究および教育が新たに導入された時代である。新聞ジャーナリズムに放送が加わった時代、マス・メディア全体を含んで総称的に「マス・コミュニケーション研究」ということばを大学に取り入れ、新時代に合致した教育計画をたて、総合的教科書を編集したリーダーは、言うまでもなくウィルバー・シュラムである。それだけでなく、社会科学・行動科学の専門家たちを動員して、当時のマスコミ研究には必要不可欠だった共同研究を主宰する最も有力かつ精力的なオーガナイザーだった¹⁾。

1962年、彼はVOAの依頼を受けてコミュニケーション研究の現況を世界に紹介するラジオ講座を制作した。こうして、心理学、社会学、政治学、教育学の諸分野から代表的専門家が最新の研究成果を電波に乗せ、世界に発信した。翌年彼はこの講座を『人間コミュニケーションの科学』と題する本にまとめた。その第一章は、彼自身が担当し、この新しい分野の研究動向を総括している。こんな書き出しである。

過去30年間、コミュニケーション過程とその効果の研究に関心をもつ学者が、合衆国で次第に増えてきた。コミュニケーションは、もちろ

ん、物理学や経済学のようなアカデミックな学問領域にはなっていないが、極めて旺盛な調査・研究と理論を繰り広げる分野となった。人間行動の研究のなかで、いろんな学者が行き交う最も活気あふれる十字路のひとつと言ってよい。というのもおそらくコミュニケーションこそ社会過程の基盤そのものだからだろう²⁾。

たしかにシュラムの言うとおり、コミュニケーションの理論と研究は心理学、社会学、政治学にかぎらず、人類学、言語学、数学、経済学など、さまざまな分野の学者たちの関心を集め、まさに「学問の十字路」となった。この新しい分野の研究方法について、彼は次の2点を特徴として挙げている。ひとつは折衷論的アプローチへの傾向、もうひとつは定量的アプローチである³⁾。人間のコミュニケーションを研究対象とする場合、既成の一学問分野だけでは追求しきれない。関連する諸科学を動員して対象に迫るのは当然の発想だろう。それを彼は「折衷論的」と言った。意味は別として、研究手法に限れば「学際的」アプローチとの類似点が考えられるが、使われる頻度は「学際的」の方がずっと多い。いずれの用語にせよコミュニケーションの学問的性格の一端を示唆しているように思う。

この本の目次をみると、認知的不協和理論の L. フェスティンガー(社会心理学)、SD 法の C. オズグッド(実験心理学)、おなじく実験を通して「説得」の分析を追求した I. ジャニスや N. マコビーら C. ホヴランドのもとで新しいレトリック理論を構築してきた心理学者たち、また社会調査法を導入してマスメディアのオーディエンスに与える効果を測定しマスコミ研究のモデルをつくった P. ラザースフェルド(社会学)、マスコミの社会的効果を論じている J. クラッパー(ラザースフェルドの弟子)、それから投票行動に対するコミュニケーション効果について述べている I. デソラ・プール(政治学)らが名を連ねている。シュラムは彼らの研究をひとまとめにして人間コミュニケーションの科学と呼んだのである。彼らは行動主義的・操作主義的に理論や仮説をテストし数値化する手法をとった。定量的アプローチである。そしてこのアプローチは当時の行動科学の主流だった。“客観的科学”とは煎じつめると定量性への還元だった。少なくとも“科学化する scientize”とはそういう意味だった、と考えられる。だが

ら当時のコミュニケーション科学者たちの間では、人間行動に関して「このアプローチは科学的か、あれはどうか」というのが最大の関心事だった。それが70年代半ばごろから事情が変わってくる。彼らは「科学とは何だ」と問いかけ始めたのだ⁴⁾。科学の固定観念の土台が揺らぎ、科学するということの原点を見直す必要を感じだしたというところだろうか。

もしコミュニケーション学が定量的アプローチを核とする「科学」にのみ踏みとどまっていたならば、その存在は、おそらく、社会学や心理学の一部門と見なされていたかもしれない。幸いにしてそうはならなかった。マスコミ研究においても、シュラムの視点および接近法とはまったく違った前提で注目すべきメディア論が展開されていた。カナダのトロント大学を発信地とするマーシャル・マクルーハンの活躍である。60年代初めに刊行された『グーテンベルクの銀河系』と『メディア論』は研究者のみならずマスコミ業界にも論争を呼び、彼の名は一躍世界にとどろいた。ただし小稿の課題はマクルーハン旋風ではなく、彼がコミュニケーション学にどのような貢献をしたか、である⁵⁾。

その第一は、コミュニケーション媒体が人間の知覚構造や世界の認識の仕方に及ぼした影響を論証した点である。その論じ方は、“通時的”異文化コミュニケーションによる接近とでもいうべき方法だった。すなわち、口承文化(無文字社会)の時代から現代文化(電波社会)まで三千年あまりにわたる壮大なスケールの視座を据えて、各時代の主要なメディアを比較し、それによってそれぞれの時代の人々の認識構造の特質を浮き彫りにしたのである。《メディア即メッセージ The medium is the message》の警句がそれをあらわしている。急いで付け加えるならば、彼の考察対象が主に西欧社会で、無文字社会とは古代ギリシアでホメロスら吟遊詩人が活躍した叙事詩の時代を指していること、次いで文字が導入されるが、それはアルファベットすなわち表音文字であること、手書き文字時代に続いては、15世紀グーテンベルクによる印刷術の発明に始まる活字時代、そして20世紀の電波時代までを展望する。マクルーハンは、それぞれの時代の新しいメディアの出現つまり技術変革がもたらす新しい思考形式や社会生活における経験の新しい仕切り方ないし識別法を、他の時代と比較することで捉え

たのである。例えば、声による伝達法とアルファベット文字による伝達法の比較(ホメロスとプラトンの思想の対比)⁶⁾、電波メディアの視点からみた文字文化や、活字による思考形式と比較した場合のテレビの特質を考察した。彼はテクノロジーを人間の身体の増幅ないし感覚の拡張とみる。この観点からすると、表音文字は視覚を拡張する技術だった。とりわけ手書き文字から活字へと進む過程を経て、西欧人にとって視覚は他の感覚をさしおいて経験を統合する原理にまで広がった。視覚の重視によって、アルファベットの文字環境に内在する継続性、統一性、連結性が強調され、結果として意味を分離・断片化しては繰り返し使うかたちでの思考のつながりと直線の論理(lineality)を身につけた西欧人が形成されたわけである。

いっぽうテレビ媒体はどうか。マクルーハンはテレビは触覚の拡張だと言う。さらに触覚には感覚全部を総動員する作用があると言う。「感覚の交響」である。彼はそれをモザイク構造と見なす。モザイクは非連続的、非均衡的であり、思考の流れは非直線的で、それは触覚的テレビ映像と同じ作用なのだ。われわれに全感覚をまるごと使って参加させ、深く関与させるものがある。翻って文字文化では、視覚の全面的拡張によって時間と空間の統一的構造化(遠近法ないしパースペクティヴの発見)が意図され、その結果、距離をおいてものをみる態度やインパーソナルな非関与性(客観的姿勢とはこのことか?)が要求されたのであった。テレビ文化との対比は明瞭である⁷⁾。

マクルーハンのテレビ論からもう一点述べれば、テレビは、世界で起きたどんな出来事でも、誰もがそれを同時に知り、誰もがそれに参加できる媒体だということである。かくして、口承文化の時代のような世界の再部族化つまり部族的社会の復活が始まり(テレビニュースやスポーツニュースを見れば明らか)、世界は《地球村 The global village》となった。

以上のように、マクルーハンの考察は観察と洞察を経て刺激的結論(媒体の意味解明)に到達する。その著作は、文学、哲学から技術史にいたる浩瀚な文献やその他の資料(新聞、広告など)からの引用で埋められている。

III

コミュニケーション学一般の地平のなかでマクルーハンのメディア論はどう位置づけられるだろうか。この点については、ケネス・パークのドラマティズムが極めて有効な方法だと私は考える。《ドラマティズム》は、周知のとおり、パークの構築した言語と思考の分析理論である。彼は、言語と思考を何よりも「行為」の様式として捉える。言語とは《シンボルによる行為 symbolic action》の体系なのである。「ドラマ」とはもともとギリシア語で行為の意味であり、のちに演劇の意味に拡大するが、ドラマティズムの名称も、パークがその原義をふまえてつくった用語だろう。ドラマティズムは「行為」というキータームをめぐる用語群の分析に基づいて、人間関係や人間の動機を考察するための方法論であり、それに対応する批評法である⁸⁾。

「行為 Act」が成立するためには「行為者 Agent」がいなくてはならない。行為者が行為をするのは特定の状況においてである。「場 Scene」はその行為がいつどこで起きたかといった背景や状況を指す。行為はどんな手段や道具によってなされるのか。それが行為の「媒体 Agency」である。さらに、なぜその行為がなされるのかという「目的 Purpose」があってはじめて行為の完全な意味が成立する。行為、行為者、場、媒体、目的。パークはこの五つの用語を Dramatistic pentad と呼んでいる。ドラマティズムの基本五語あるいは五項目セットと訳しておこう。彼はこのセットを動機の生成原理と考えたのである。しかし、実際に行為の意味を考える際に、われわれは五項目中の二項目のさまざまな組み合わせ(サブセット)を考えて動機説明に迫るだろう。例えば、A という人物のこの異常な行為はこういう異常な状況ないし場から引き出された、とか B という人物の性格がこういう行為となった、という具合に。パークは、前者を場—行為比 (scene-act ratio)、後者を行為者—行為比 (agent-act ratio) と呼ぶ。五項目のなかの特定の項と項の関係をまず選び、さらにその他の項目やサブセットを考慮したうえで動機を引き出す。「比 ratio」とは二項目間のいろんな関係——因果的、派生的、時間/空間的、類比的などさまざまな関係——をあらわすことができる。その比の選び方によって人間行動の多様な解釈が可能にな

る。

さて、このドラマティズムの立場からすると、どんなマクルーハン像が立ち現れるだろうか。パーク自身の考察があるので、それに依拠しながら分析してみよう⁹⁾。まず『メディア論』の書名について。原名を直訳すると『メディアの理解: 人間の拡張』となる。メディアは明らかに「媒体」に当たる。副題の人間は「行為者」。そして拡張は媒体と行為者の関係をあらわす「比」に当たるだろう。つまりこの本のテーマは「媒体—行為者比」であり、ふつう発想されるような「媒体(手段)—目的比」ではない。パークはこの比を類比関係と解釈する。具体例を挙げれば、活字媒体は視覚の、テレビは触覚の機能として捉えられる——この点はすでに前節で述べた。

新しい媒体がどのように発見され、引き出されたか、という状況ないし場についてマクルーハンの言及はない。彼の視線はもっぱらコミュニケーション媒体が人間の環境をどう変えるかという点に注がれる。ドラマティズム用語で言えば、媒体と場の比——ここでの比とは因果関係ないし派生関係ということになるだろう。マクルーハンは『ゲーテンベルクの銀河系』の前書きで「銀河系」は環境と同義だと述べたうえで、テクノロジーは新しい人間環境をつくりだすと言っている。新しい媒体環境(場)が人間(行為者)の新しい認識法に作用する。これは、場—行為者比と置き換えられよう。マクルーハンの思考はドラマティズムから見ると、このように解釈できる。

「メディア即メッセージ」の場合はどうか。メッセージとは伝達内容である。ところがマクルーハンはこう言う。「メディアの『内容』はいつも必ずもうひとつのメディアなのだ。文章(writing)の内容はことば(speech)である、書かれた語が活字であるように...では『ことばの内容とは何か』ときかかれたら、『それは現に活動している思考過程であって、それ自体は非言語レベルのもの』と答えればよいのだ」と¹⁰⁾。これは到底われわれの期待する答えとはいえない。そのズレこそ、この有名なアフォリズムの含蓄なのだが、読者が納得する“論理的”説明は加えられていない。「内容」の説明にはパークも納得しない。彼はどう解釈するのか。文の“シンボル行為”に関わることは、当然ながら“内容”に関わることだ。発言された内容は

「行為」に属するし、その発言の“意味”は「目的」に属するはずだろう。マクルーハンはコミュニケーション媒体というテクノロジーに力点を置くあまり、この二つの項目（「行為」と「目的」）が欠落した、と指摘する。

本節でわれわれはドラマティズムの方法論を通してマクルーハンの思考形式の分析を試みてきた。その結果、五項目セットのなかで極端なまで媒体へと還元化する態度が鮮明に現れる。彼はメディアの現実を反映しようとしているんな見方や表現を試みる。その表現を発展させ、思考を展開するには現実の部分を選び取らなければならない。どんな選択にせよそれは、それぞれの状況によっては、現実の屈折ないし歪みとならざるをえない。さらにその延長線上で考えて行くと、マクルーハンが選び取ったメディアの現実は、極度に屈折し、歪んでいけばこそかえってメディアの特性を大寫しに反映した、という見方が可能かもしれない。

過度の還元はどの学問でもそれぞれの主要概念を徹底して追求するとき生じるものではないだろうか。社会学者の J. R. ガスフィールドは、ドラマティズムの観点から、社会学は「場」を、心理学は「行為者」を過度に強調する言語として見ることができる、と言う。ドラマティズムのどの用語も比も現実の還元法なのだ。人間はどんな場合も部分的見方しかできないのだから、なんらかのかたちで還元せざるをえない。彼はさらにパークのこたばを引用して、文化もまたその文化独自の還元法をもっており、その観点から（つまり現実のある部分や特有の価値の強調から）すべての物事を見る傾向にある、と述べている¹¹⁾。

ガスフィールドの指摘は、パークの思想の根幹に触れる手掛かりとなる。本節での考察を中心に三点だけ挙げてみよう。(1) ドラマティズムは、その対象が個人にせよ集団にせよ文化にせよ、納得し理解する現実のかたちの捉え方を示すシステムである。つまり現実解釈の普遍的方法論となりうる。(2) ドラマティズムは、言語と思考、あるいは人間の行為のかたちに対して多様な解釈を可能にする多元主義的な方法論であること。(3) その根底には、現実を反映しようとするわれわれのこたばは、部分を切り取った現実の選択であること。その選択には、場合によって、現実の屈折あるいは歪曲とならざるをえないという自覚がある¹²⁾。

多様な解釈は選択の多様性に対応するだろう。普遍的方法論とは、ジャンルを越えた接近の仕方を暗示するだろう。この批評法は、越境する知の技法であり、バーク的に言えば《批評の批評》となる。

IV

おそらく1970年代はコミュニケーション研究にとって過渡期ではなかったろうか。ほとんど固定観念となっていた行動主義的科学観から次第に解き放され、さまざまな思想、哲学、イデオロギーをもとに研究法の試行錯誤を繰り返しながら研究対象と向き合った時代、別言すれば、定性的、思弁的方法を含めて多元主義的態度が定着してきた10年間だったように思われる¹³⁾。この時代はまた、一部の識者を除いて敬遠されていたバークへの評価が次第に高まる時期とも重なる。人文学、社会科学の諸学においてバークの理論と思想の真価が認められてきたのである。そして1984年にはコミュニケーション学者を中心にケネス・バーク学会が設立されるに至った。

1980年、高名な人類学者クリフォード・ギアーツが「ぼやける学問ジャンル——社会思想の再構成」と題する論文を発表した¹⁴⁾。この論文で彼は、社会科学全般において明らかになりつつあったある重大な変化に着目し、その考察を試みたのである。その変化とは、社会科学の学問領域が互いに混じり合い、境界線がぼやけてきたこと。社会に関する科学的探求とその理解に、人文学の類推思考(analogies)が使われるようになったことである。実際に彼が注目したのは、ゲームとの類比(the game analogy)、ドラマとの類比(the drama analogy)、テキストとの類比(the text analogy)の三種類の類推思考によるアプローチである。

とくに、ドラマとの類比では二つの相対するアプローチが取り上げられている。ひとつはV.ターナーの儀式論、他のひとつはバークのシンボル行為論。これはもちろんドラマティズムのことであり、劇場とレトリックの親和性を志向するとギアーツは解釈し、これを説得としてのドラマと規定する。いっぽうターナーの儀式論は、劇場と宗教の親和性を志向するものと解釈し、これを交わり(communion)としてのドラマと規定する。そしてこの両者の理論が、ギアーツ自身のバリ島における政治形態を分析し

た「劇場国家論」に発展したと述べている。

ギアーツが論じるこの事例には二つの前提がある。言うまでもないことだが一応確認しておこう。第一は、文化人類学が社会科学に属していること。第二は、パークのドラマティズムを人文学の理論に位置づけていることである。そしてギアーツはパークの肩書を文学理論家および哲学者として紹介している¹⁵⁾。いっぽうターナーは社会学者として人文学的発想を理論形成に適用したわけである。

ドラマとの類比に限らず人文学の類推思考が社会科学の研究になぜ使われるようになったか。その鍵は人間のシンボル作用にあると考えられる。(類推とはシンボルの働きによる思考実験ないし思考テストで、その代表例がメタフォアである。未知のものを理解するために既知のものを使うと言ってもいい。仮説としての意味が未知の対象の理解につながるかどうか、その類推に誤りがないかどうかは、事例毎に「現実」に当たって確認する必要がある。事実と違えば——パーク的に言って、“客観的反抗”に出会えば——修正しなければならない。類推思考は常にこの修正法を用意しておかなければならない。)ギアーツによると、社会生活をシンボルの観点から構成されたものとして認識する志向が、社会科学において顕著になった。ということは、シンボルの「意味」をどうとらえるか、そのとらえ方が社会や組織体を理解し解釈する原理となると考えてきたこと。シンボル作用(あるいは記号作用と言ってもいい)を通して人間の行為とその意味の説明原理を発見すること。つまり、社会学者にとって(社会学、人類学、心理学、政治学等のジャンルを問わず)シンボルの諸体系の分析に主眼点をおいて、それらの体系と世界のありようとの関係を問うことこそが最大の関心事なのだ、と結論づける。

ところで、「ぼやける学問ジャンル」にはコミュニケーション研究とかコミュニケーション理論といったことばは一度も登場しないが、シンボルや意味や解釈に焦点を合わせていく接近法は、コミュニケーション学やレトリック理論と重なる部分が多い。その意味において、ギアーツ流に言えば、コミュニケーション学自体を「ジャンルなき学問」、あるいは同様の意味で「脱領域の知」と呼んでいいだろう。

古代ギリシアのコミュニケーション学だったアリストテレスの『弁論術 *Technê Rhêtorikê*』では、その冒頭でレトリックは弁証法 (*dialektikê*) と同様にかなる個別の科学 (*epistêmê*, 英訳では science) にも属さない、と述べてある (1354a)。このアリストテレスの発言も、「レトリックとはジャンルなき学問」と同じ主旨と考えていいだろう。

V

「コミュニケーション学とはどんな学問か」という問いにどう答えればよいのか、自問を繰り返していたとき、突然ずっと以前に読んだノースロップ・フライの『批評の解剖』のことを思い出した。この本はもちろん文学批評の理論構築を試みた名著だが、その序論で彼はこう言っている。文学は研究主題 (a subject of study) ではなく研究対象 (an object of study) である。では研究主題は何か。それは文学批評だ。「文学を学ぶ」ことは不可能だ。人が学ぶものは文学批評であって文学ではない、と¹⁶⁾。

私は自分に問い返した。コミュニケーションは研究主題ではなく研究対象ではないか。では研究主題は何か。それもまたコミュニケーションと、われわれはふだん言っている。コミュニケーション学の不安定感、どうやら主題 (subjects) と対象 (objects) に同じことばを使ってきた点にその一因がありそうだ。人間のコミュニケーションの営みはあくまで研究対象であって、研究主題ではない。

研究対象としてのコミュニケーション——これは人間の行動一般ということと変わらない。ポール・ワツラウィックら『人間コミュニケーションの語用論』の著者たちが述べているように《One cannot *not* communicate. 人はコミュニケートしないわけにはいかない。》日常語に翻訳すれば「何でもコミュニケーション」ということになる¹⁷⁾。これでは学問の主題にならないのは明らかだ。

では、何が研究主題となるのか。学として理論構築するにはどんな主題と取り組まなければならないのか。

まずコミュニケーション行動に関して次の三つの質問をしてみよう。

「コミュニケーション学」の確立に向けて

- (1) それは何から成り立っているか。
- (2) それは何をするのか。
- (3) それはそもそも何であるか。

(1) はコミュニケーションの構造について、その最小単位を問うていると考えれば《記号 signs》と答えることができる。(2) については、人と人の中でメッセージのやりとりが行われている。そのセットを《相互作用 interaction》と呼ぶ。個体内コミュニケーションを含めることもできよう。例えば、自我と自我像の相互作用というように。(3) はコミュニケーションの「本質」を問うている。だからこれが研究主題の核となる。ジャーガン・リューシュとグレゴリー・ベイトソンは、それは《関係性 relationship あるいは relatedness》だと答える¹⁸⁾。記号と相互作用と関係性。この三つをコミュニケーションの理論構築のための枠組ないし座標軸と考えたい。

記号とはその記号以外のものをあらわすもの、と定義しておく。メッセージは記号から成る。メッセージが A から B へと伝達できるには、A と B が使用する記号に共通のコードがなければならない。記号とコードとメッセージを基本用語として、さまざまな概念や用語が引き出され、記号のシステムが形成される。コミュニケーション学が記号論と共有する領域である。

次の相互作用と関係性についての論述はベイトソンの考え方に基づいている。

相互作用の現場はコンテキストである。コンテキストなくしてコミュニケーションは成立しない¹⁹⁾。ということは A の発するメッセージだけではコミュニケーションとはいえず、B がそのメッセージに反応して B のメッセージを A に返す(フィードバック)——言語および非言語の両レベルを含めて。このセットが相互作用の最小単位であり、このようなメッセージのやりとりを含んだコンテキストによって「意味」が産み出される²⁰⁾。

この意味の領域は、相互作用のコンテキストより一段高次の論理階型であり、ベイトソンはこれをメタコンテキストと呼び、コンテキストとは区別して考える。これはコンテキストのコンテキストであり、より一般的な

呼び方でいうとメタコミュニケーションとなる。A と B の関係性とはベイトソンの理論ではメタコンテキストないしメタコミュニケーションの領域に位置づけられる。しかし、関係はメッセージと別にあるのではなく、A と B のメッセージの交換に際してメッセージのなかに内在的にこもっているものなのだ (Bateson, 2000, p. 275. 邦訳 377 頁)。そして相手との関係とは、例えば好意や悪意、信頼や不信、そのほか甘え、無関心、愛等々、あらゆる関係のありようで、それがコミュニケーションの意味を産み出すのである。

具体的に B. P. キーニー(ベイトソンに師事した家族療法セラピスト)が挙げている例を参考に、相互作用と関係性についてごく簡単に説明しよう²¹⁾。観察対象は A と B とのコミュニケーション。A は夫ないし父親、B は妻ないし息子としておく。

A は口うるさくなじむ。B は怯みながら黙っている。この相互作用がエスカレートしながら繰り返される。このコンテキストから A と B の間に一つの関係パターンが感知される。ベイトソンはそれを「相補的關係 complementary relationship」と言う。これがメタコンテキストだが、さらにこのメタコンテキストの形態を支配—服従関係と捉え直すことができる。これは相互作用の関係パターンの記述と考えられる。

もし A と B が上の例と逆に、どなり合い、どなり返す相互作用がエスカレートする状態になると、これは「対称的關係 symmetrical relationship」と言い、競争関係とかライバル関係という形態で捉えることができる。相補的と対称的といずれの関係も抑制されることなく一方的に進展するプロセスを、ベイトソンは「分裂生成 schismogenesis」と呼び、それは歯止めがきかなくなると関係の破綻へと行き着く。また両方の関係がうまく混じり合っていると、バランスのとれた状態が生まれる²²⁾。

本節の初めの部分で、われわれは研究対象としてのコミュニケーションを人間行動一般として最も広義に定義づけた。次いで研究主題についての考察を試みたわけだが、ここでコミュニケーションの再定義をしておきたい。

コミュニケーションとは人が記号ないしシンボルを使って人と意味を共

「コミュニケーション学」の確立に向けて

有する行為をいう。コミュニケーションがうまくいかなかったり失敗することは日常しばしば経験するが、これは当事者間でコンテキストや関係性が共有されていない——つまり互いに別々のコンテキストや関係性を選択したため、意味が共有できない状態をいうのである。これでは相互理解が得られない。ベイトソンの二重拘束理論は、コンテキストと関係性の選び方が恒常的に混乱していて、意味の共有が不能になった病理が主題である。また、コンテキストや関係性の意図的混同は、ユーモアやメタフォア、あるいは詩や絵画、音楽など美的作品を生むことがある。

VI

ベイトソンのコミュニケーション理論については改めて稿を起こすことにして、ここでは、1980年、彼が死を迎えるまでの学究生活のなかで、コミュニケーション学がどんな位置を占めているか考察し、小稿を終えたいと思う。

R. ドナルドソンは彼の編集になるベイトソンの論文集『聖なる統合——続精神の生態学』のイントロダクションをこう書き出す。

グレゴリー・ベイトソンは、人類学者、生物学者、哲学者として、人間生活の営みのほとんどあらゆる領域にわたって行動と経験の研究・思索に従事した、20世紀における最も展望力ある思想家の一人で、探求した対象間、領域間に常につながり（connections）を見る学究だった²³。

ここに具体的分野は書かれていないが、40年代後半から60年代にかけて彼が精力的に取り組んだ学問は、サイバネティックス、精神医学、そして生態学、認識論などであった。その間に発表された遊びの理論、学習理論、そして二重拘束理論などはとくに注目された学説だが、これらはいずれも彼のコミュニケーション理論と重なり合っている。

「越境する知の巨人」というのにふさわしい足跡である。ドナルドソンが指摘したように、ベイトソンは探求した数々の対象の間に、また学問ジャンルの間につながり（関係）を見、断片化の様相が濃厚になってきた現代人

の生活と知識を統合化するようわれわれに促してくれたのである。ベイトソン自身のことばで言うと、《The pattern which connects 結び合うパターン》となる²⁴⁾。革新的学際人の彼の視線はこうしてたえず見えない「結び合うパターン」に向けられていた。そして晩年の彼の最大の関心は生態学と認識論へと収斂されていく。

『精神の生態学』第五編への導入として彼はこう書いている。「生命体の認識の形態を意味するエピステモロジーと、大きな生命世界の生存のロジックであるエコロジーとは、結局同義の言葉であるように思われる」(邦訳 528 頁)。

死の前年に出版された『精神と自然』の最終章(父と娘のメタローグ)の終わり近くに、《rigor and imagination》という魅力的なことばが聞かれる。これはベイトソンの認識論を簡潔に言ったものだろう。「(科学の)厳格性と(詩的)想像力」。そしてこの“と”に結び合うパターンが含意されている。科学的認識と美的認識が結び合っ、さらなる統一を求める姿がそこにある。彼は言う。「今なお人間の心の中に、統一を求める衝動、われわれをその一部として包みこむ全自然界を聖なるものとして見ようという衝動が働いていることは確かである」(邦訳 24 頁)。

「コミュニケーション学とはどんな学問か」について問い続け、考察を重ねてベイトソンの認識論までたどり着いた。ここでもう一度この学問について振り返り、以下の点を確認して擱筆したい。

第一に、この学問は学際的に開かれており、決して閉じた体系ではない。第二に、ご都合主義的な理論の寄せ集めはコミュニケーション学を構成しない。第三に、コミュニケーション学は、ベイトソンの認識論のようなより高次のメタ科学へと向かうべき、開かれた体系である。

〔謝辞〕 三人の先生のおかげでこの論文を完成することができました。斗南病院長本原敏司先生。立教大学教授久米昭元先生。札幌大学教授御手洗治先生。感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

「コミュニケーション学」の確立に向けて

注

- 1) McAnany, E. G. (1988). Wilbur Schramm, 1907–1987: Roots of the past, seeds of the present. *Journal of Communication*, 109–122.
- 2) Schramm, W. (1963). Communication research in the United States. In W. Schramm (Ed.), *The science of human communication: New directions and new findings in communication research*. New York: Basic Books, p. 1.
- 3) *ibid.*, p. 5.
- 4) Wilder-Mott, C. (1981). Rigor and imagination. In C. Wilder-Mott & J. H. Weakland (Eds.), *Rigor and imagination*. New York: Praeger, p. 18.
- 5) McLuhan, M. (1962). *The Gutenberg galaxy: The making of typographic man*. University of Toronto Press. (森常治 訳『ゲーテンベルクの銀河系——活字人間の形成』みすず書房、1986)
McLuhan, M. (1965). *Understanding media: The extension of man*. New York: McGraw-Hill. (栗原裕・河本仲聖 訳『メディア論——人間拡張の諸相』みすず書房、1987)
マクルーハンは *Understanding media* のなかで、テレビが子供に与える影響に関するシュラムの調査・研究を批判して、彼のアプローチは文章の内容分析法と同じ発想で、テレビ映像の特質についての研究ができていないと論じている。(p. 19. 邦訳 19–20 頁)
- 6) 古代ギリシアの口承文化およびアルファベット導入後の文字文化についてマクルーハンが主として依拠した文献:
Lord, A. B. (1960). *The singer of tales*. Harvard University Press.
Havelock, E. A. (1963). *Preface to Plato*. Harvard University Press.
- 7) 活字媒体とテレビ媒体の文化的比較については以下を参照:
McLuhan (1965), pp. 333–335. (邦訳 348–351 頁)
- 8) Burke, K. (1969). *A grammar of motives*. University of California Press. (First Edition, 1945.)
Burke, K. (1967). Dramatism. In L. Thayer (Ed.), *Communication: Concepts and perspectives* (pp. 327–353). Washington, D.C.: Spartan Books.
Burke, K. (1968). Dramatism. In *International Encyclopaedia of Social sciences* (pp. 445–452). New York: Macmillan.
- 9) Burke, K. (1973). *Language as symbolic action*. University of California Press (pp. 410–418).
Burke, (1967), in *Communication: Concepts and perspectives* (pp. 345–352).
- 10) McLuhan, (1965), p. 8.
- 11) Burke, K. (edited by Gusfield, J. R.) (1989). *On symbols and society*. The University of Chicago Press, pp. 15–16.

- Gusfield, J. R. (1989). The bridge over separated lands: Kenneth Burke's significance for the study of social action. In H. W. Simon & T. Melia (Eds.), *The Legacy of Kenneth Burke*. The University of Wisconsin, p. 38.
- 12) Burke (1969), p. 59
- 13) Wider-Mott (1981), pp. 18-19.
- 14) Geertz, C. (1980). Blurred genres: The refiguration of social thought. *The American Scholar*, 165-179.
- 15) パークの専門分野を特定するのはむずかしい。詩人、小説家、文学批評家、音楽批評家、意味論学者、記号論学者、哲学者等々。1984年、パーク学会設立時の肩書は、Critic-at-Large だった (*The Legacy of Kenneth Burke*, vii)。本節との関連でいえば、「ジャンルなき批評家」あるいは「ジャンルを越えた批評家」だろうか。S. ハイマンは、パークには特定の分野はなく、パーク学とでも言うほかないだろうと述べている。
- Hyman, S. E. (1955). *The armed vision*. New York: Vintage Books, p. 359. (赤祖父哲二・栗原裕 訳『ケネス・パークの方法』大修館書房、1974年、62頁)
- 16) Frye, N. (1957). *Anatomy of criticism: Four essays*. Princeton University Press, p. 11. (海老根宏 他 訳『批評の解剖』法政大学出版局、1991年、18頁)
- 17) Watzlawick, P. (et al.) (1968). *Pragmatics of human communication: A study of interactional patterns, pathologies, and paradoxes*. London: Faber and Faber. (尾川丈一 訳『人間コミュニケーションの語用論——相互作用パターン、病理とパラドクスの研究』二瓶社、1998年)
- 18) Ruesch, J. & Bateson, G. (1951). *Communication: The social matrix of psychiatry*. New York: W. W. Norton, p. 21, 209.
- 19) Bateson, G. (2000). *Steps to an ecology of mind*. The University of Chicago Press, p. 408. (First Edition, 1972; Ballantine Edition, p. 402.) (佐藤良明 訳『精神の生態学』新思索社、2000年、536頁)
- 20) *ibid.*
- 21) Keeney, B. P. (1983). *Aesthetics of change*. New York: The Guilford Press, pp. 37-40.
- 22) Bateson, G. (1980). *Mind and nature*. Bantam Books, pp. 208-209. (佐藤良明 訳『精神と自然』新思索社、2001年、262-263頁)
- 23) Bateson, G., ed. by R. E. Donaldson (1991). *A sacred unity: Further steps to an ecology of mind*. New York: Harper Collins, ix.
- 24) Bateson, G. (1980), p. 11. (邦訳 13頁)